

第五章 第十八方面軍の作戰準備

第一節 第十八方面軍の編成

一、既述の如く昭和二十年五月緬甸方面軍はラングーンを失ひ今や僅かにシツタン河以東の地区を保持しあるに過ぎざる状況に立至り方面軍としての地位を喪失し正に第三十九軍の前衛たるの性格に変化せりと見るに至当とするに至れり。此に於て南方軍は緬甸方面軍を解組してテナセリウム地区に一軍を置き第三十九軍を方面軍に改編増強して在緬甸の軍をも併せ指揮せしむるに至当なりとし其の旨大本營に意見を具申し七月中旬第三十九軍を第十八方面軍に改編せらるゝに至れり。

右改編に伴ひ新に第十五軍司令部、第十五師団、第五十六師団、第五十三師団及北部佛印より転進中の第二十二師団等を其作戰地域到着の時を以て方面軍の指揮下に入らしめらる。

第二節 昭和二十年七月中旬策定せる第十八方面軍作戰計畫大綱

三二

昭和二十年七月中旬策定せる方面軍作戰計畫大綱左の如し

作 戦 方 針

一、方面軍は敵の空、海、陸上よりする各種の進攻を撃破し泰国の要域を確保して南方軍の作戰補給を容易ならしむ。

二、泰國軍に對しては為し得る限り同盟軍として我に共同せしむるに努むるも、最悪の場合に於ては機先を制し、背叛の企図を破摧す。

作戰指導要領

三、盤谷及其の周邊の主要飛行場は軍作戰の支撐として之を確保し得る如く堅固に築城す。

四、盤谷周邊に降下する敵空挺に對しては、所在の部隊を以て神速果敢に之を撃滅するに努むるも状況により北部泰、西部泰方面より兵力を集中して撃滅することあり。

五、泰緬國境方面よりする敵の地上進攻に對しては泰緬鐵道及ラーヘン

0581

トピサンロীগ道に沿ふ地区に於て縦深抵抗により持久しつゝ攻勢兵力の集中を待つて之を撃破す。

六馬来半島方面よりの上陸進攻に對しては縦深抵抗により持久しつゝ

ベツブリー附近に於て攻勢を取り之を撃破す。

七北泰方面は獨立してその要域を確保し得る如く有力なる兵团を配置して持久を図る。

八ナコンナヨーク周辺には豫備陣地を堅固に準備し最悪の場合、軍作戦指導の複郭たらしむ。

兵力部署

九盤谷防衛隊

長小原少將

歩兵四箇大隊、砲兵二箇中隊、高射砲一箇中隊基幹

盤谷市内（日本軍駐留地域内）の要点を堅固に占領し在盤谷諸部隊の防衛を指揮す特にドムアン飛行場方面より突進する敵及敵の爆撃

三三

0582

に對し長時期各據点獨立して戰鬥し得る如く準備す其の持久期間は
少くも三箇月とす。

十 主要飛行場防衛部隊

1. ドムアン飛行場守備部隊

長 第一航空地区司令官

第一航空地区司令官の指揮下航空部隊（約二、〇〇〇名）

野砲兵第四聯隊の一箇中隊

2. ロツプリー飛行場守備部隊

飛行場大隊及其指揮下部隊（約一、〇〇〇名）

野砲兵第四聯隊の一箇中隊

3. サラソリー飛行場守備部隊

第四師団歩兵第六十一聯隊の歩兵一箇中隊

野砲兵第四聯隊の一箇中隊

各飛行場守備部隊は其砲兵を堅固なる施設下に收容し滑走路を有効
に縱射し得る如く其他の部隊を以て飛行場内外に火力を及ぼし以て

敵空挺部隊の降下攻撃に對し強靱なる戦斗をなし得る如く準備す。
土機動豫備兵団

第二十二師団（長平田中將、歩兵二箇聯隊、砲兵一箇大隊欠）
第四師団の歩兵第六十一聯隊主力及野砲兵第四聯隊の一箇大隊
サラブリー東南側高地（ピンコン地区）に歩兵三箇大隊、十榴一箇
中隊分の陣地をナコンナヨーク地区に約一箇師団の防衛陣地を構築
し敵空挺部隊の降下に際しては主力を以て之に對し攻勢をとる。
盤谷方面の戦況に依りては主力を該方面に使用す。
ピンコン地区及ナコンナヨーク地区陣地は方面軍複郭陣地たり得る
如く施設し且必要の軍需品は方面軍に於て集積す。

0584

去第十五軍

第十五軍司令部（司令官片村中將）

第四師團（歩兵第六十一聯隊及砲兵二箇大隊欠）

第五十六師團

第十五軍は獨立して北泰の要域を防衛す。之が為敵の進攻企圖に対し主力を以てケンタンーカワ道（第四師團）及チエンマイートングー道（第五十六師團）を縱深に占領し又ランバン附近を確保す。中部泰の戦況に依りては軍の一部を該方面に転用することあるを豫期す。

状況已むを得ざる場合に於ても第十五軍は北泰要域に持久して敵の南進を妨害し戦勢の挽回を図る。

去第十五師團（長渡中將）

第十五師團は泰緬鉄道に沿ふ地區を縱深に亘り占領してモールメン方面よりする敵の地上進攻を阻止す。

盤谷方面の戦況に依りては第十五師団の一部を該方面に抽出転用することあるを豫期す

両獨立混成第二十九旅団（長佐藤少將、歩兵六營大隊、砲兵一營大隊基幹）

テナヤリウム地區の防衛に任ず之がため一部を以てタポイ、メルギ
一飛行場を成るべく永く保持してテナヤリウム地區に於ける敵の上
陸、空襲企図を妨害し縱深によりて持久しつゝ主力を以てベツブリ
一周邊を確保し軍攻勢の支障たらしむ。

該旅団は通信連絡施設の進捗に伴ひ第十五師団長の指揮下に入らしむ

第五十三師団（長林中將）

第五十三師団は緬甸よりモールメンコーカレイーメソードーラー
ヘン道方面に沿ひラーヘン、ピサヌローク間の地區に集結して再建
す。但しその一部を以てメソード、ラーヘン間の地區に縱深に陣地
を占領して在緬甸日本軍と協同して敵の進攻企図を妨害す

師団主力は其集結地域に於て戦力を恢復し方面軍の豫備兵団たらしむ

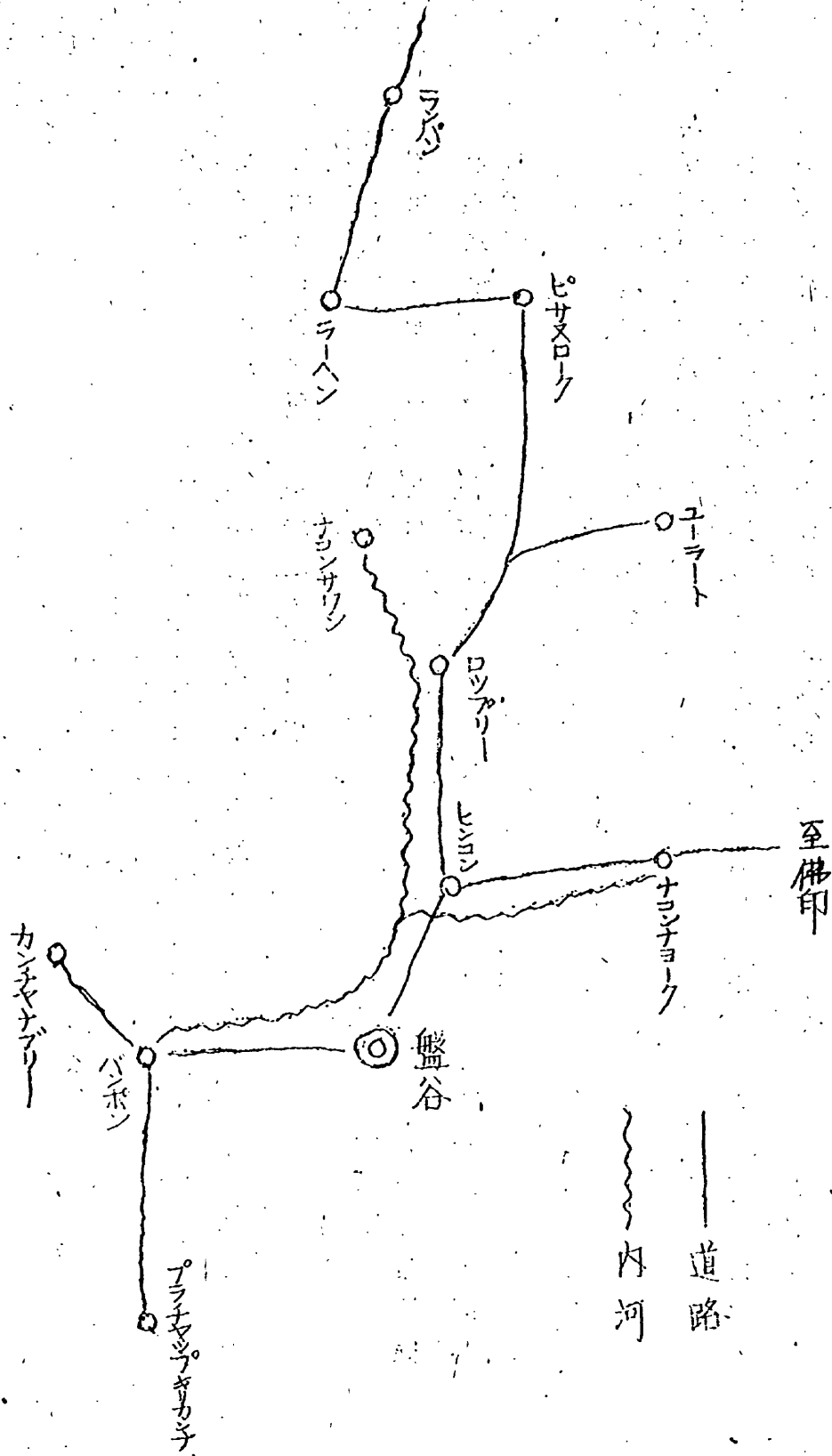
夫東北部泰防衛部隊

佛印より泰に移動中の第二十二師団の歩兵一箇聯隊砲兵一箇大隊を基幹とする部隊を東北部泰防衛部隊に豫定す該部隊はコラード、ウドン、ウボン地區に位置し我が飛行場及鉄道施設を掩護し且敵の秘密飛行場の覆滅を図る

交通通信

五 交通

確保すべき幹線道路及内河左図の如し之が建設は努めて泰側に負担せしめ技術を要する部位は日本軍に於て実施す



鉄道は努めて永く泰國側をして運行に努めしめ己むを得ざるに至るも日本軍に於て輕列車及軌道走行自動貨車を運行して緊急軍需品の輸送及交通連絡を確保するに努む

大通信

方面軍と南方軍總司令部、隣接軍及各兵団間の通信連絡は専ら無線連絡に依る。之が為對爆施設を徹底強化して最後の時期に至る迄連絡確保に努む

補給及軍需品の集積

大弾薬、資材燃料

全会戦を通じて使用し得る弾薬は〇、四会戦分とし各兵団毎に分散集積せしめ作戦の推移に應ずる如く各兵団に其使用を委す弾薬は方面軍として爾後の補給を期待せず其他の資材に於ても軍自ら現地に於て調達する如く自活態勢を強化す 自動車燃料は各兵団毎に作戦

四〇

0589

に應ずる二箇月分を保管せしめ方面軍豫備として全兵力に應ずる一
箇月分をピンコン及ナコンナヨーク地區に集積す

手糧 秣

各兵団は其作戰地域に於て少くも概ね一箇年分の糧秣を確保し得る
如く準備し、獲得困難なるものは早期に方面軍に於て調達交付す
各兵団部隊は少くも四箇月分の糧秣を陣地内部に集積し糧秣不足に
より長期作戰を断念するが如きこと無からしむ

衛生材料

概ね作戰一箇年分を各兵団に分配保管せしめ一部を方面軍豫備とし
てナコンナヨーク地區に集積す

衛 生

二五患者は各作戰地域の兵団毎に收容管理し後送せざるを本則とす。
但し後送可能な場合特種治療患者のみ盤谷陸軍病院に後送す。
兵站病院及陸軍病院に豫定配置左の如し。

命
121兵病

命
124兵病
命
命
命

命
命
命
命
命

命
133兵病

命
148兵病

命
命
命

第三節 作戰計畫に基づく作戰準備促進の概要

一、防衛促進に伴ふ泰國側の態度

晝夜兼行にて七月上旬までに概成せる障地設備を引続き増強せる結果、泰側に於ては一部に不安動搖の兆を認められたるにより、軍は七月中旬泰側軍政の指導者及民間の一部に最も堅固に設備せる鉄道聯隊の障地を公開見学せしめ、日泰同盟の精神により泰側に於ても米英軍の進攻に對する準備を促進することを示唆せり。

その眞意は、飽くまで同盟の信義を守り敵をして窺察するの虚隙ならしめ、泰國をして戦禍より免れしむるに在る旨を強調せり。その結果は泰國側の誤解を一掃すると共に背叛を企図しありし一部の軍人に恐怖の感を與へて断念せしむるの効果を收めたるもの如し。

七月上旬泰國首相ナバイオンは日本軍憲兵の尾行を感知して激怒し

2592

軍司令官及山本大使を官邸に呼び日本軍が尾行を附したる不信義を
難詰し、辭職せんとせしが、情勢切迫の危機に於て政変を惹起する
こと付、それを契機として泰國軍警の背叛を誘發するの危険あるに
鑑み、軍は虚心坦懐にその非を陳謝して漸くアパイオンの辭職を懇
意せしむるを得たり。

日泰關係を最後まで友好に保持すべく、泰國民の感情を軟げるため
に七月末日泰兩軍の戦死者に對し、共同して慰靈祭を施行せること
は無形的に大なる効果を收めたることもまた見逃し得ざるものあり。

二 第二十二師団の集結状況

軍は第二十二師団を機動豫備兵団たらしむる爲盤谷附近集結を促進
しありしが八月初旬師団司令部及一部先発部隊が盤谷附近に到着
したるのみにして主力は猶東北部泰及佛印に位置する時期に於て終
戦を迎へたり。

三 第三十七師団及歩兵第六十一聯隊の作戦準備

0592-2

ナコンナヨーク地区の陣地設備に従事し陣地内部の交通施設及電需
品格納施設の一部を概成したる時期に於て終戦となれり。

四 第十五軍の作戦準備

第十五軍司令部は七月上旬北泰ランバンに前進す。

第四師団主力は概ね六月末迄に北泰に前進し要地の陣地設備を概成す。

第五十六師団は泰緬國境到着直後終戦となれり。

チェンマイートングー道の構築は約一年半の日子を要したるも泰側
の努力の提供と日本軍（投入兵力常時歩兵一箇大隊、工兵一箇中隊）
の努力とに依り終戦迄に辛うじて自動車を通ずるに至り緬甸方面軍
の撤退に寄與せり。

五 第十五師団の整備

師団主力はバンボン地区に集結し裝備の充實戦力の恢復に努力中に
して未だ終戦迄に作戦行動を發起し得る程度に至らず

六 獨立混成第二十九旅團の作戰準備

四五

タボイ、メルギー地区の障地施設を概成し又メルギー、テナセリウ
ムーブラチャップキリカント道を自動車道に改修し諸隊新配置に感
かんとして終戦と交る。

七 第五十三師團の戦進

未だ緬甸國內に在り、軍との連絡成らずして終戦と交れり。

第六章 終 戦

八月に入るや外國放送は頻りに日本降伏を豫想せしむるものあるのみ
ならず八月六日廣島の原子爆弾による惨害及八月九日に於ける蘇連の
参戦放送等事態は全く豫断を許さざるものあり。

茲に於て軍は各兵団に其状況を通報し萬一事態の急変あるも一絲亂れざ
る統制の下嚴肅なる軍紀を維持を要望すると共に再三總司令部に幕僚
を派遣し萬一に應ずる措置に関し軍の決意を具申するところあり。

0594